

2019. 3月24日 日本国際児童図書評議会 子どもの本の日フェスティバル

野口光世講演会

「布のえほんの40年」

<野口光世さんプロフィール>

1934年東京都生まれ。四谷雙葉学園卒。町田市在住。

旧日本勧業銀行(現在みずほ銀行)本店に10年勤務。3人の子2人の孫がいる。

現在「ぐるーぷ・もこもこ」顧問

1979年「世界の布の絵本・さわる絵本展」と出会い、布の絵本の世界の魅力にひかれて、手作り絵本の仲間と共に布のえほんのボランティアグループ「ぐるーぷ・もこもこ」を発足。グループは、川崎市麻生区に本部があり、横浜市青葉区、東京都町田市、滋賀県湖南市に支部があり、メンバーは総勢約100名。今年(2019年現在)40周年を迎える。布のえほん84点、布のおもちゃ200点以上を考案。

現在、川崎市北部地域療育センター内にプレイルームを開きながら、地域を中心に図書館、障害児者施設、作業所、子ども支援センターなどに作品をプレゼントする活動や各地図書館の布のえほんボランティア養成講座にも協力している。

『手作り布の遊具1』 ぐるーぷ・もこもこ編著 偕成社 1985

『手作り布の遊具2』 ぐるーぷ・もこもこ編著 偕成社 1986

『ままのちくちく 1』のぐちみつよさく グランまま社 1994

『ままのちくちく 2』のぐちみつよさく グランまま社 1994

『はじめての手芸シリーズ(2) ふわふわ布のおもちゃ』 野口光世著 偕成社 1996

『手作り布の絵本と遊具 こんちゅうえあわせ』野口光世著 偕成社 2002

『手作り布の絵本と遊具 くだもの』野口光世著 偕成社 2002

『フェルトでつくるスイーツ』野口光世著 汐文社 2008

<講話>

布のえほんとの出会いは1979年に開かれた「第1回世界の布の絵本・さわる絵本展」でした。その頃、私たちは神奈川県立川崎図書館で「手作り絵本講座」を受講し、講座終了後「川崎手作り絵本の会」という、自主グループを作り、世界に一つしかない、自

分の子どもの為の手作り絵本を作って楽しんでいました。そして、世界の布の絵本展を開くにあたり、布の絵本の作品を募集しますという「お知らせ」が偕成社から図書館に届き、講座担当の課長さんに見せていただきました。おもしろそう、やってみないと、話し合いましたが、それにしても布の絵本を、全然見たことも聞いたこともないので、偕成社の電話番号が出てましたから、電話を掛けて、「もし集まったらどんなものか見せていただけますか」と言いましたら、「いいですよ」ということで。もうお亡くなりになりましたけど、元編集長の鴻池さんが、「偕成社へ来てください」と言ってくださったので、私たち何人かで、4人か5人か忘れましたが、偕成社へ伺いました。それが、私が初めて目にした布のえほんです。その時、横浜、さつき攪上さんもお話になられましたけど、よこはま布えほんぐるーぷになる前の横浜文庫連でも、布のえほん作っていらして、長崎源之助さん原作の『ちょうちょう』という布えほん作品が、その時ありました。それを私鮮明に覚えてます。それから、あと、スウェーデンの国立教育研究所で、障害を持った子どもたちを学校に迎え入れたとき、あの頃からもう、みんな、障害を持ったお子さんは全部、健常児といわれるお子さんたちと一緒に学校行ってたんですね、スウェーデンは。それで、その子どもには、特別な教材が必要だということで、布の絵本を作られた方があって。それで、私もすごく分厚い本だった記憶はありますが、中身はあんまりよく覚えてないんですけど、ポリー・エドマンっていう方が作られた絵本を見せていただいたり。で、なんか面白そう、まだ分かってませんので、面白そうっていうことで私たちは、私の家にちょうど材料もいろいろあったし、それから集まりやすい場所だったので、うちに集まりまして、偕成社の呼びかけに応えて、いっぱい作って出そうと、はりきりました。

それで、「各自それぞれ、一冊ずつノルマで作ろう」ということで、私が最初に作ったのは、この『おばけのほん』っていう本なんですけれど、



偕成社が後で出してくださった本にも作り方載っていますので、目にしてくださった方は大勢いらっしゃると思います。下の娘がまだ幼かったんですね。私は、本当は手作り絵本のテーマで、『おばけのほん』作ろうと思っていたんですけど、布のえほん

を作りました。布で作ると、紙では作れない面白さっていうか、取ったり剥がしたりもできるし、なんていうのかしら、紙では表現できないもの、立体的にも表現できるので、すっかり面白くなっちゃいました。それで、みんなと一緒に共同制作したのが、『はだかんぼうにできるかな』って、これ男の子が着ていますが、男の子と女の子ペアで、いろんな手の動作で何枚も洋服着ているんですけど、こうやって裸んぼうにできるかな。私最初、男の子、女の子っていう題にしていたんですよ。名前は鴻池さんが付けてくださったんです。「『はだかんぼうにできるかな』はどうだ？」と。で、「ああ面白い」ってその名前を付けていただきました。これが私の処女作です。

それで、そんなことをしてまして出展しました。第1回世界の布の絵本展さわる絵本展」は1979年上野の松坂屋で開かれて、私そのときの資料あんまりないもんですから、覚えてないんですけど、どのくらいの作品が出てたんでしょうか。保育園の先生が子どもたちと一緒に作った布のえほんたくさんありましたし、それから、高校の家庭科のグループの方たちが作った本も出たりして、いわゆる今のような布の絵本のグループはそうたくさんもなかったと思うんですけど、たねの会さんもいらっしやってたんですよ、その頃ね。

最初から私なんか、何も分からないで取りかかって、面白そうでじゃんじゃん作っちゃったんですけど、そうしましたら、それがまた鴻池さんのお気に召したのかどうか、鴻池さんって全国展の仕掛け人ですけど、「おばけの本面白いから、講習に行かないか」。「私まだ自分では2作しか作ってないのに、講習行くんですか」と、記念すべき最初の講習にうかがったのが、深川の富岡八幡宮の中にある、幼稚園でした。ここではこの前事件が、悲しいことがありましたけどそれはさておいて、本当に作ったすぐから講習に行ったんですよ。ずうずうしくも。で、鴻池さんが、前半、布の絵本の話もしていただきましたし、それから絵本の中で、やっぱり市販されている絵本では満たされない障害を持つ子どもたちがいるんだよってということで、「障害を持つ子どもにこういう絵本も大事なんですよ」と、鴻池さんが前半お話していただきました。

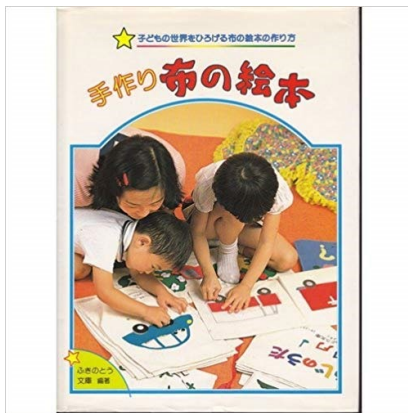
その後一回で済まなくて、鴻池さんが「行こうよ」って声掛けてくださるもんですから、私も若かったからホイホイと付いて行って、かなり、練馬だの、一番遠い所は石川県の金沢にも行ったりしました。そんなことで、大して作らないうちから、なんか飛んで、歩かせていただきました。そういう思い入れがいっぱいあります。

その中で、第2回が東京八重洲ブックセンターで開かれました。その時も、参加する方たち新しい本をいっぱい作られて。私たちも頑張っって新しい本、いろいろ作って持って行きましたけど、その時に偕成社が、手作りの布の絵本の作り方の本を、一番始めに作ってくださったのが、ふきのとう文庫の布の絵本ですよ。ちょっと実物がきょうないんですけど、

これじゃない？

ありますか。

これじゃないの？



手作り布の絵本—子どもの世界をひろげる布の絵本の作り方— ふきのとう文庫 偕成社 1979

1980年、第2回から、世界、はもう外して、『布の絵本・さわる絵本展』になっていましたけど、2回から8回まで全国展は開かれました。1980年に『月刊絵本とおはなし』という、こういう月刊誌が偕成社から出ていたんですね。で、その中で、絵本の作り方ということで、12カ月のうち8回も布の絵本の作り方が出ました。それで、奈良にある中登美保育園の先生方がすごくいっぱい作ってらっしゃって。きょう、どうしてもご紹介したいものだからちょっと持ってきちゃいました。私たちの作品も5回出させていただき、ふきのとう、それから、広栄保育園というのは姫路ですか。いろんなこの、家庭科で生徒さんが作られたすごくすてきな布の絵本など、1年間で8回作り方を紹介されていました。これが2年目です、布の絵本が。で、一気に偕成社さんが、作り方の本出してくださったので、それを見て作られる方が広がったんじゃないかなとおもいます。その中でちょっと一つ、9月号に載った作品でいまだに世に出てない作品があって。もったいないなって、実は私、偕成社から返却された1冊をもっていますので、いい機会なので、ちょっとお見せしたいなって思って持って来ました。これは『ちいさな森のトゲラー』って言って、中登美保育園の先生が作られたんですね。お話は長くなるからしませんけれど、このトゲラーさんが、保育園に行きたくて、木に登ってお日さまに聞いたら、「嫌いなものいっぱい食べて、大きくなったら行けるよ」って言われて、一生懸命、ピーマン、にんじん食べたんですね。そしたら、これが変身するの。こんなふうに。皆さんやっぱり見てないですよ、この作品。こんなふうに変身するんです。それでストーリーがあって、歌を歌いながらお友達がみんな、きょう入れてないですけど、いっぱいここに友達に乗って、みんなで仲良く保育園行きましたって、そういう物語なんですけど、こういうふうに変身するっていうのが、もう1980年に出たんですね。それで、どうして世の中に出ないかっていうと、この作り方がなかったもので、鴻池さんに言われて私が作り方を書きました。型紙も起こしました。で、一点しかない中登美

保育園さんの作品の複製3冊を作りました。一回目の全国展が終わった後に布の絵本研究連絡会が偕成社の中に作られたんですね。で、布の絵本研究連絡会が、第2回からずっと全国展にいろいろと作品を送る役割を果たしてくださる。そこに納めるために、私3点作ったんです。すごくいいから、本当は複製作りたんですけど、どうしても許可くださらないんですよ。中登美保育園さんに何回お電話しても許可がいただけないので、門外不出です。もったいないですね。それを偕成社の千葉さんという編集者に訴えて、千葉さんも交渉して下さったんですけど、どうしても作らせていただけない。

この作品が出たとき鴻池さんが、「野口さんたちも変身するの作れよ」と言われました。「そんな簡単に変身するもの作れませんよ」と言いながら、みんなで話し合っただけで作ったのが、『きかんしゃもこもこ号』です。



これも作り方が出てないので、あんまり皆さん複製は作られないと思いますけど、私ちゃんと型紙も作り方も起こしてますから、それはちょっと後でまたご相談の上でってことになると思いますが、お作りください。これは機関車がね、こういうふうにもこもこ号がいて、毎日友達がここにいっぱい出ていくのですが、ちょっとポケットに入ってるんで全部は出しませんが、とにかくここには友達がいっぱい住んでるんですね。そして、その友達を乗せて、毎日毎日ポッポッポッポ、遠い山の向こうを回って町へ出かけて行きます。町は遠いし、町とこの原っぱとを往復してるんですけど、町は遠いし、友達はいっぱい乗ってきて重いし、「何とかなんないかな」って言って。それで夜になると帳が下りて、物知りのフクロウさんが出てくるんですね。このフクロウさんに、「もうちょっと早く走れるようになりたいよ」って言ったらおまじないを教えてください、子どもたちに、「お目々つむって一緒に言って」ってやるんですけど、お目々つむんない子が一人でもいると、なかなかこれ変身できないんです。みんなが目をつむってくれたら、バリバリこうやって剥がして行って、みんなが目つぶってるな、「ペアッ」って言うと、機関車が新幹線に変身して、すごい喜んでね。で、早く朝になれっていうことで朝になって、また「おーい」って今度はものすごいスピードで走っちゃうもんだから、

私ちょっと歳をとりましたので走りませんが、若い頃はもう吹っ飛んで演じてたんですけどね。こうやって友達を乗せようと思ったら、今度は止まれなくなっちゃって、一日中走りまわったので、やっぱり疲れ果てました。もう一回おまじないを教わって、元の姿に戻って、翌日何食わぬ顔して、「昨日はごめんね」「昨日なんだか変なもんがビュンビュン走ってたよ」ってみんなが言って。昨日来なかったから、乗る、乗るってみんな乗ってきてものすごく重くなっちゃったけど、やっぱり、重くても町が遠くても友達と一緒にいいなっていうお話で。一応変身するんです。トゲラーさんにはかなわないなと思いつつも、これを作りました。これもなんとか、もっと作ってくださるって方があれば広げたいなと思ってます。

話がいろいろ、あっち行ったりこっち行ったりしてごめんなさい。そういうことで、もう2年目には、偕成社の鴻池さんのお力添えで、全国展と同時に作り方の本もできて、ボランティアグループが各地にずいぶんできてきました。そして3年目ですけど、1981年は国際障害者年です。これはお手元にお配りして、JBBYさんにもお許し得ていますが、1981年にIBBYの要請で、国内の障害を持つ子どもたちの絵本をいろいろと調査なさって、それを世界に報告なさったんですよね。後でどうぞゆっくり読んでください。で、その中で力を発揮したのが、布の絵本やさわる絵本。さっき言いました、偕成社内の布の絵本研究連絡会から作品が世界に送られていて、それを見た各国ですごい反響があったんだそうです。その報告を偕成社の中島さんって、この方も亡くなっちゃって、私一人生き残りみたいで悲しいですけど、素晴らしい先駆者が皆さん亡くなってちょっと焦っております、なんて。中島さんの報告を読んでいただければ、世界でどんなに布の絵本が、驚かれ、喜ばれ、迎えられたかってことが書いてありますので、後で、どうぞゆっくり読んでみてください。

私たちも、よこはまさんもそうだったと思うんですけど、さっきの『はだかんぼうにできるかな?』を17点、偕成社に送ったと思います。それが世界に送られて、ミュンヘンからイスラエルから、それからアイオワ州のなんとか研究と書いてありますから、各国に、17カ国に送られて、本当に鴻池さんのおかげで、右も左も分からない、いまだにまだ分かっておりませんが、布のえほんとは何ぞやって定義すら分からないままに、どんどん作品が海外にまで行っちゃったっていうのが実情でした。

そういうわけで、私、まだあの時の熱気が、40年やらせてもらってるのかな、なんていうふうに感じてます。布の絵本連絡会が全国展を開く傍ら、各地方から要請があるとやっぱり、研究連絡会から少し作品を送るんですよね。よこはまの方も見えてらっしゃいますが、亡くなられた、よこはま布えほんぐるーぷの創始者の池上さんと一緒に、富山へ泊まりがけで行ったのも、本当にいい思い出です。で、富山の方たちに布の絵本の説明をしたり、いろいろ見ていただいて、その後また全国回らせていただきました。沖縄にも行ったんですよ。私も、若かったからできましたが、私事ですけど、子ども3人いますけど、ちょうど母が家に来てくれて同居してくれましたので、もうお任せ。そ

ういう条件があったから私も動けたのだと思います。

それで、1981年に3回目が開かれたのも、上野の松坂屋でした。それから国際障害者年っていうことで、布の絵本、さわる絵本もかなり、海外も含めて、国内でも認知されるようになって、作り手もどんどん増えていったんじゃないかなと思ってます。それで、第4回、1982年からは、日比谷シティっていうところでやったんです。その日比谷シティってところはスペースがすごく広くて、展示会場もゆったりしてましたけれど、他のお部屋もいっぱい使えるといういい条件があったものですから、82年から5回続けて分科会も開いたんですね。それで、みんなて情報交換をしたり、布の絵本の講座があったり、それから、鴻池さんや小林静江さん（ふきのとう文庫創始者）もお話なさったと思いますけど、いろんな布のえほんはこういう子どもたちに使われて喜ばれてますよ、なんて実例をみんなて交換し合える場を5年間続けました。それで1986年が最終回でしたが、その頃には、「ボランティアグループが全国に100以上できたよ」って鴻池さんが言っていたのを私は記憶しています。正確には、本当申し訳ない、数字知らないんです。偕成社さんに資料が残ってるんじゃないかなと思うんですけど、どうも、あんまりきちとした資料が残ってないようで、残念です。でも、何とかして見つけたいなとも思っていますけれどね。

そういうことで、全国に100を超えるボランティアのグループができて、もう盛んに布の絵本が作られるようになってきましたし、それから図書館も関心を持つようになって、図書館のハンディキャップサービスでもかなり使われるようになってると思います。その関係の図書館の方もきょうお見えになってますけど、ハンディキャップサービスで貸し出してる所もあれば、一般貸し出しをしてらっしゃる図書館もありますよね。こんなことで申し訳ないんですけど、私たちもこのグループ、第1回の世界の布の絵本さわる絵本展終了後7人で始めたんですけど、とても制作も追いつかないし、それから、あっち行けこっち行けってお声掛けていただいたので、飛んで歩く、手ぶらで歩くわけにもいなくて、メンバーを広げなきゃなっていうことで、もっとみんなに呼びかけてグループを大きくしなきゃねって、地域のカトリック教会の地下ホールをお借りすることができるようになったので、そこで地域にいっぱい呼びかけをする。そのためには展示会やらなきゃねっていうことで、私たちもかなり、2年に一遍ぐらい、最初の頃は地域で展示会やりました。

全国ネットで飛んで歩いているのに、肝心の地元では何もしてなかったんですね。でも地元で、やっぱり地域に根を下ろして、これから布のえほんを作っていくときには、本当に子どもたちが必要としているものを、私たちは学びながら作っていかなくちゃいけないんじゃないかっていう反省の上に立って、少しずつ仲間も広げながらやっています。

今度、自分のグループの話になっちゃって申し訳ないんですけど、今もここは、川崎、麻生区って、小田急線の新百合ヶ丘なんですけど、そこに、本部がありまして、52、53名います。しかし、その中に、後でお話しますが、もこもこプレイルームだけに関

わってるメンバーもいますので。作り手は 30 数人って言っていたんですけど、高齢化といろいろな家庭の事情等々で、最近ではグングン少なくなっちゃって、30 人切って、26、27 人かなって。週に 1 回集まって作っております。それからあと、今もこもこの中で私の次に古い中山さんが青葉台に青葉台グループを作って、今 22 人で活動しています。本部で川崎市の麻生区を中心なんですけど、その中で布のえほんやおもちゃを使ってくださるところを開拓しながら、そことコンタクトを取って進めています。青葉台は青葉台で地域に根ざした活動ってことで、横浜の青葉区の中で頑張ってるやっています。それから、私、町田に住んでいますから、町田にもグループを作りました。あと滋賀県湖南市っていうところにグループができて、両方とも 2011 年にできたので 9 年目です。そこを、全部をトータルすると、100 名を超えるメンバーがいて、お互いに情報交換しながら各地域で活動しています。

最近はだんだんと本当に時代が変わったんでしょうかね。若い方、なかなか針を持たない方も増えているのか、若い方もお忙しいのか、なかなか入ってくださいませんよね。そういうことはまた後で、みなさんと情報交換の中で、どうしたらいいかっていうのを話し合わなきゃいけないなどは思っています。

それから、配るのがいいですか。ちょっと、全員分ではないんですけど、ちょっと資料を回していただきながら、見ていただけたらなと思っています。

うん。三つとも配っていただいちゃっていいです。

三つほど資料を作っていますけど、その一つは、布の絵本にもやはり著作権があるっていうこと。いきなりそこに飛んじやって申し訳ないんですけど。ということで、攪上さんのご尽力で、よこはま布のえほんと、ふきのとう文庫と、私どものぐるーぷ・もこもこが 2015 年の夏に、布絵本のサイトを立ち上げてくださって

(<https://www.bf-ehon.net/nunonoehon>) そこに布のえほんにも著作権がありますと主張しています。どうして著作権を主張するの？ボランティアで作るんだからいいんじゃないの？というお声もあると思います。でもやっぱりいろんなことに、なんて言ったらいいんでしょうね。いろんなものに全て著作権があるように、布のえほんも、著作権はあると思います。著作権を主張するにはそれなりの作るほうにも責任があると思うんです。私たちも、デザインとか色彩とかいろいろ、それからあと子どもたちに使ってもらったの結果というか、そういうことも全部含めながら、少しでもいいものという努力をして作っています。よそのグループさんももちろんそうだと思います。お互いにお互いの著作権をやっぱり大事にしながら、布のえほん、いいものを作っていく。グループたくさんできたけれども、何でもいいやっというわけには、やっぱりいかないじゃないかなって。いいものを子どもたちに手渡すっていうのは、すごく大事なことじゃないかなって思っています。私なんかも、自分がつくったもの、グループで作ったものが、いい

かどうか分からないですけども、それは子どもたちが結果を教えてくれることだと思ってます。それで、作って行く中でいろんな出会いがありましてね。今、ちょっとお配りした中に何枚か、ホチキスで止めたのを回覧で回していただけたらなと思うんですけど、川崎北部地域療育センターっていうところで、そこの先生のご希望で、もこもこプレイルームを今、開かせていただいているんですね。これを開くことによって私たちは本当に、子どもたちからいっぱい学ぶ機会を与えていただけて感謝してます。今、何年になりましたっけ？ 25年以上たってますよね。川崎北部地域療育センターは、知的障害、肢体不自由、いろいろ障害を持ったお子さんたちの通学前、まだ学齢に達しないお子さんたちの通所施設なんですね。そこで週一回、私たちの作った作品だけなんですけれども、もこもこプレイルームっていうのを開いて、そちらの責任者の、森村さんもきょう参加してくれてますけど、週一回プレイルームを開く中で、いろんなことを学ばせていただき、そこから子どもたちや先生たちの要望を拾い上げて、いろんなものが作れてきてるなって。布のえほんを作っていくときに、やっぱり子どもたちと触れ合わないで自分勝手に作ってたんじゃあ独りよがりの布のえほんしかできないんじゃないかな。

そういう意味では、私たちは3年目ぐらいから、川崎中のいろんな施設や教育委員会もそうですけど、含めて、使ってください、見てくださいってもう、すごい売り込みやりました。その時一緒に売り込みで飛び歩いた、私の仲良しの友達は、残念なことに、もこもこ始めて5年目で発症して、7年目に大腸がんで亡くなっちゃって。今でも、彼女がいてくれたらな、なんて思いますけど、すごい人でした。2人でかなりいろんなところを回ってる中で、川崎の教育委員会で、自閉症のお子さんの指導をどうするかという研究する学級を担当していた大河原先生に出会って。そこで自閉症のお子さんにこんなものが欲しいあの先生はすごい元気がいいものですから、もう待たなして。年中、じゃんじゃん注文が来ました。それでもおかげさまで、私たちは右も左も分からなかったけど、先生のおかげでずいぶんいろんな本が作れたなと思っています。

その中で一つ、先生と出会って作った布のえほん『なにをしているの?』。これも古い本なんですけど、例えばこれは言葉かけていうか、「何をしていますか?」って先生がおっしゃると、自閉症のお子さんだから集中しないときもありますよね。でも、紙では集中しきれないけど、布で作ってあると、この感触がいいのか、あるいは一部が動くことによって、興味を持ってくれる。その上根気よく毎日のように先生が問いかけをしていて。私、時々見学させていただいてるとき、たまたま私が行ったときに、「カレーライスは何していますか?」って、先生言いながらこうやってたら「食べてます」ってその子が言ったんですよ。そしたら先生が、「うわーっ、食べてますって言ったよー」って抱きしめてらっしゃる場面に出会って。ああそうかって、こういうことなんだな、布のえほんとは、と勉強させていただきました。それでその後、言葉をセンテンスにできるところまでいったかどうかは、私は知りませんが、カレーライスを食べます」まで言えるところまで先生は言わせたいと頑張っていたらっしゃってましたけどね。その後、「何

していますか。ラッパを何してますか」「吹いてます」っていうふうにして、言葉掛けの本っていうのはいくらでも作れるものですから、川崎教育研究所はもうこんな分厚い本がいて、私たちはその一部しか複製作っていませんけど、そういう自閉学級のお子さんと先生の学習の教材として、とても良かったというお話をうかがってますので、ちょっと紹介させていただきました。

あと、これも大河原先生と、一緒に作らせていただいたのが「きしゃどうぶつ号」。とにかく布で作る、せっかく布で作るんだから、カラフルで色もきれい、そしていろんな仕掛けがあるものっていうことで、結局1から5までのお勉強に使ってくださった本なんです。「1、こういうしっかりマスの中にものが収まって1だよ。ここにはちゃんとマスが二つあって、1、2っていうふうにしてマスに収めるようなものを作ってよ」って言われて、考えて持っていたのがこれで。これもかなり、自閉症指導学級でずいぶん使っていました。それで、ただの数だけじゃなくって、マジックテープだとかスナップも大小、それから、これはフックで引っかける。で、ゴムをくぐるっていうふうにして、いろんな手作業も加えられ、そのオマケにボタン掛けもあって、すごい欲張った本なんですけどね。でも、どういうふうに使ってくれるのかな、なんて思っていると、ある日のことね、このゾウさんをくるくると丸めて、運転室に乗せて、なんだか知らないけど、走り回って引きずってる子がいましたね。ああ面白いなって。大人だったらおサルさんあたりがちょうど運転室におさまるんじゃないかと、子どもの発想って面白いですね。ゾウさんがやっぱり主役だったんだなと思って。子どもから学びながら本を作るってことはすごく大事なことじゃないかなって、そんなことを思いました。

ごめんなさい、話がまとまりませんね。そんなことでいろいろ、ちょっと事例として見ていただきながらやってるつもりなんですけど、あと1、2、3、4、5っての、数字の本いっぱい作ってますけど、これもこういうふうには、こんなのはすごく単純だから、皆さんもいろんなもんお作りになってらっしゃると思いますけど、大事にしたいのはやっぱり、布で作るんだから、色彩的にも子どもの目をパツと引いて、それから感触も良くなっていうことが、布の絵本の特性じゃないかなと思ってます。

それから、支援学級の先生と出会って、やっぱり重複障害で、目も不自由でいろいろあって、「野口さんなんか作ってよ」って言われて作ったのが、この『おでかけブー！』なんですけど。これはすごく単純で、2011年IBBYの世界のバリアフリー絵本に選んでいただいた本なんですけど、音が出る本、結局、おでかけブーって感じて、お兄さん、ブツ、これお話会で使うときも一番最初に使うんです。で、みんなしー、しーって。みんなが静かになったところで、ブツ、ブツ『おでかけブー！』って



初めて。赤ちゃん押すとみんなギャーって笑ってくれて。最後まで音が出るっていうことで、これ、そのお子さんとっても喜んで使ってくださいましたんですね。IBBYの Outstanding Bookにも選んでいただけて、作り方の本も出してますので、もしそういうお子さんに会われたら、参考にさせていただけたらと思っております。

それからあと、布のえほんっていろんなものがありお話ししながら、ストーリーの繰り返しを楽しむ、これは『これはわらぶきやねのいえ』ってのもありますね。「これはわらぶきやねのいえ、これはわらぶきやねのいえに住んでいるおじいさん、これはわらぶきやねのいえに住んでいるおじいさんが飼っているウシ」というふうに、ずーっと繰り返し繰り返しお話ししながら、最後には「これはわらぶきやねのいえに住んでいるおじいさんが飼っているウシがしたふんにたかったハエを食べたカエルをふんずけた、ウマの尻尾で作ったはたきでお掃除をしているおばあさんが住んでいる家」ということで、最初に戻るんですけどね。子ども、面白がって。あとは、これを全部パネルに貼ってやっても楽しいし、エプロンシアターにしてやっても楽しいかなと。お話でもいろいろできますよね。

それから、本当にまとまりのない話をしてまして申し訳ありません。あと一つ、子どもたちって歌が大好きですよ。著作権のことをさっきちょっと触れましたけど、歌を作るときには、歌には著作権がありますよね。それを私、気が付いたのは実は、福岡の県立図書館にお邪魔したときに、福岡県立図書館が歌の、いっぱい布の絵本の蔵書があったんですね。こんなに九州は盛んなんだって、全然知識なく呼ばれたからホイホイと行って、とんでもない、ものすごく立派なもので、熊本の方のもありましたし、長崎の方たち、ゆりの会があそこは第1、第2、第3とありますよね。方たちとか、それから福岡にもいろんなグループがあって、布のえほんすごく盛んに作ってらっしゃるんですね。それで歌の本を全部 JASRAC に登録して番号を取ってらっしゃるって、福岡で聞いたんです、私。それまで子どもの本で『こんこんくしゃんのうた』は、これは子どもたちが大好きな歌だからって、実は JASRAC に登録しないで作っちゃってたんですね。でも福岡で耳にして、実際に目で見てきてしまったら、やっぱり歌詞に、歌には著作権ちゃんとあることに気がつきました。で、JASRAC はヤマハの音楽教室のことなんかでも、

この前ちょっと紙面賑わしたりしてましたので、皆さんご存じだと思いますけど、作詞者あるいは作曲者が音楽家著作権協会 JASRAC に登録してらっしゃると、しっかりとその権利を JASRAC が管理してらっしゃるんですよね。この『こんこんくしゃんのうた』も、実は JASRAC にちゃんと、作詞者が登録してらっしゃいました。だから、歌詞を私、書いてましたから、やっぱりお聞きしに行かなきゃいけないなっていうことで、偕成社の千葉さんに SOS を出して、一緒に行っていただいて、JASRAC にお話をしたんです。本当言うと、布の絵本っていうのはボランティアの手で作られているのがほとんどで、それで、そんなに1曲、確か1800円で1000曲まで使えるって、それは出版物とか、あるいはカラオケとかCDとかそういった類いでは確かに安いですけど、私たち1000冊なんて作れるわけがない。どんなに作ったって、年間、いろんな本作中の1冊なんだから、例えば『こんこんくしゃんのうた』だって1年に2冊ぐらいしか作らないし、もう払えませんっていうことで。散々布の絵本を持ってって説明して、交渉したんですけどね。商用に使わないっていうことで、800円にしてくださったんです。資料をお配りしているので、回ってきたら見ていただきたいんですけど、私たち実は、歌の絵本22冊作っているんです。その中で、あんまり使わないからごめんなさい、見送らせていただく、作っちゃってるけど外に出さないようにして見送ったものもありますし、調べていったら、なんていうのかしら、作詞した方が亡くなられて70年たつともう著作権消滅しますけど、そういう消滅したものもある。それからわらべ歌はもちろん使っている。そんなことをやって、よく使う歌8曲だけ申請しました。それで、お金は800円にしています。正直に申し上げます。

で、1曲800円をお払いして、あちらは「2年ごとに更新してください」って言われたので、「困ります」って言ったんです。「布のえほん1冊作るのにどのくらい時間かかると思いませんか」って。私、いろんな資料作って持って行ったんですけど、実を言いますと、私たちのグループは今、布の絵本を84冊作っています。84冊のうち、出版社の許可をいただいて市販から作らせていただいたのは3冊あるから、81冊は全くのオリジナルで作っているんですね。こういう活動をしていますけど、その中で、歌の絵本だってそんな一度に作るわけじゃないし、2年掛けても、多分『こんこんくしゃんのうた』は、これもおかげさまで、2017年度のIBBY、Outstanding Bookに選んでいただいて、今まで日本の中でも展示がされて回っておりますけど、ちゃんと番号書いてあります。登録、お金を払うとちゃんと番号くださるんです。そうすると、出願の出と書いて、そこにいただいた番号を書かなきゃいけないこと、で、ここに書いてあるので後で見てください。それで、『こんこんくしゃんのうた』は賞をいただいた関係で、1年に10冊、でももうそんな作らないですよ。次の年からは5冊ぐらい。そんなで。だから2年は嫌だってことで。そしたら、向こうは布の絵本に対する認識がないから、規定もないし曖昧なんですよ。だから、それはもう皆さんと話し合いながら、みんな、やっぱりどういふうにしていったらいいか話し合っ、できればただにしていだける運動をしなきゃい

けないかな、なんて思っています。すごく大事なことですよね。自分たちの著作権を主張するのだったら、人の著作権を侵しては絶対いけないと思います。



これ、オタマジャクシ書くと作曲者にも払わなきゃいけないから 1600 円払わなきゃいけないんですよ。だから、やみくもにオタマジャクシは書きません。作詞に関してだけお払いして、それで「2年で更新しろ」って言われていますけど、2016年に出願したけどちょっと様子を見ながら、来年あたりするかなって。それまでにもう一回、なんていうのかしら、使わせてくださいっていう、昔の布の絵本研究連絡会みたいに、バーっと全国から声がまとめられたらすばらしいんじゃないかな、なんて私思ってるんですね。もこもこ一つのグループではとても力が足りません。歌は子どもたち、本当に好きですよ。だから、できれば使わせていただけたらな、なんて思っています。本当、とりとめもない話をしています、そろそろ締めなきゃいけない時間ですね。

あと、何かお話しなきゃいけないことで、障害を持ったお子さんたちに、私たちは今現在、最初は貸し出しもしてたんですけど、悲しいことに私たち、いまだに場所がないんです。使う3カ月前にお当番が、朝9時までには、社会福祉協議会の受付へ行って、そこに9時までに来た人で抽選ですよ。私も去年秋、2回行きましたけど、1回は当たり取ったのでラッキーと思ったけど、2回目は、取れないとその次の日、次の日ってまた9時までに行かなきゃいけない。私そんなことしてられないから、実は同じビルの中に、有料の貸してくれるところあります。でも、そこ1日使うと9800円。大変ですよ。1万近い、年間10回借りたら10万かかっちゃうわけですよ。ボランティアもそのお金もつたないから、みんなで必死になって、本当は定例が月曜日なんだけど、取れない取れない、毎日行って最後は金曜になっちゃうこともあるんです。そんな悲しいことをしてるもんですから、貸し出しなんてとてもできないので、私たちはもう、障害を持つお子さんの施設、あるいは支援学級、その他、必要としてくださる所にプレゼントっていう形で、今、作り続けてます。だから大変です。それを言っちゃいけないんですけど。場所ほしいな、それはまた後のお話でしていただければと。

それで、障害を持つお子さんのところ、もう全て回ってるわけでもなく、まだまだ足り

ません。できるだけのことをしてるんですけどね。

また、被災地の子どもたちのこともあります。3.11のあの東北大震災のことを皆さん思い浮かべられると、今年9年目に入りましたよね。で、その前にも阪神大震災があって、その時私たち、玩具福祉学会、私も中山さんもその学会の会員なものですから、プレイバスっていうのを神戸に走らせたんです。子どもたちのおもちゃを積み込んで。その時にもいっぱいおもちゃ作って協力したんですけど、3.11のときにはいち早くJBBYが、あしたのプロジェクトを立ち上げてくださった。私たち、一つのグループではとても何もできないけれども、JBBYが、あしたのプロジェクト立ち上げてくださったので、少しお手伝い、ほんのわずかししかできないんですけど、お手伝いしながら心を届けることができるかなってやらせていただきました。あしたのプロジェクトは終結して、今、希望プロジェクト、これJBBYに言えって頼まれたわけでも何でもありませんけど、希望プロジェクトってやっぱり Children in Crisisってかなり大変な状況の中にいるお子さんを、JBBYのほうで把握してらっしゃるので、毎月、絵本を送る活動を続けてらっしゃいます。私たち毎月、お送りすることできないので、せめて1年に1回か2回は、一緒に送っていただけたらなと思ってお届けしてます。

本当にもう最後に、私から訴えたいのは、障害を持つお子さんのこともあるし、それから今、虐待のいろんなニュースを聞くと、もう耳をふさぎたくなるようなニュースも流れて。でも川崎市も例外じゃないですね。前、プレイルームをやらせていただいている北部地域療育センターの所長さんをやってらした方が、今、川崎市虐待対策室の室長さんやってらして。「野口さん」ってお声掛けてくださったので、川崎、七つの区に布の絵本やおもちゃを届ける活動も、それは障害を持ったお子さんでなく、心に傷を負ったお子さんたちのところにも、布のえほんはやはり届けていきたいなと思ってます。本当に、話が長くなって申し訳ありませんけれど、障害を持つお子さんと同時に、やはりそういう子どもたちのことにも、もし力があれば、ゆとりがあれば、みんなで心を寄せていきたいなと思っています。

長くなって、本当とりとめも無くて申し訳ありません。ありがとうございました。ごめんなさい、もうひとつ、子どもたちとの出会いの中で、もこもこのメンバーの中山さんは最近、目の不自由なお子さんに出会って、目の不自由のお子さんのさわる絵本は、私たち今まで手つかずできましたけど、青葉台のほうでこの頃一生懸命取り組むようになってます。またいろんな情報をお寄せいただけたらなと。私も、聾学校が町田市にもあるんですね。野津田の聾学校の先生からの依頼で、聾学校にもこの頃ご縁ができて。本当に活動していると、こんなに障害を持つお子さん、いろんなところにいっぱいいらっしゃるんだなって、今も本当に、どんどん新しいところから依頼されてます。

それで、プリントでお配りした中の一つは、北部地域療育センターで言語指導の先生やってらした井原先生が今、東京国立小児病院の耳鼻科の先生をしてらして。子どもたちの、重複障害の難聴のお子さんも含めて、重複障害をお持ちのお子さんの検査とか相

談とか指導に、「野口さん、手伝って」って言われて。七つのカテゴリーを先生が文字で書いてらしたの、私一生懸命、98枚、絵、描いたんですね。それをみんなで作って、今そちらのほうで、すごく喜んで使っていただいています。でも、何よりも子どもたちが喜んで使ってくれて。布の感触、すごくいいんですね。又、つきそいに来てらっしゃるお母さんたちが、子どもたちが言葉を発するっていうことで、本当に、泣かんばかりの顔をしてらっしゃるっていう報告を聞くと、子どもたちだけじゃなくて、お母さんにもやっぱり喜んでいただけるんだな。だから、私たちすごくいいことしてんのかもしれませんよ。力はまだまだ足りないけれど、みんなで工夫し合いながらこれからも続けていきたいなと思っています。ごめんなさい、終わりますって言っというてまた話が続きましました。終わらせていただきます。どうも失礼いたしました。